

P-F 反応パターンと Baumtest での樹木画 パターンとの関係*

一 谷 彊 ・ 津 田 浩 一**
西 尾 博*** 岡 村 憲 一****

A Study on the Relationship of P-F Reaction Patterns to Tree-Drawing Patterns in Koch's Baumtest

Tsuyoshi ICHITANI, Koichi TSUDA,
Hiroshi NISHIO, and Norikazu OKAMURA

Received May 1, 1978

Rosenzweig P-F Study はその名のように、もともと Rosenzweig, S. が人の欲求不満反応の研究のために考案したものであるが、今日においては、投影法のひとつとして、欲求不満反応を介して personality に接近し理解するための技法として広くとり入れられるようになっている。これは最近の林・一谷 (1976) による『投影法の基礎的研究——Rosenzweig P-F Study を中心として——』によって一応の実験的・臨床的・因子分析的検討がまとめて報告され、ある程度、投影法のひとつとしての基礎づけがなされた。

しかしながら、まだ種々の吟味検討すべき課題が残されていることは否定できないところである。一般に、投影法といわれているものについて最も問題となるところはやはり妥当性や信頼性に関する問題ではないかと思われる。

ここでとりわけ妥当性についてみると、Cronbach and Meehl (1955) などを初めとして、Cronbach を中心として検討・吟味されているものが代表的に挙げられるだろう。そして、安藤・大村・花沢 (1967) によると、諸研究による妥当性の種々相を表 1 と表 2 のように集約している。

これらの妥当性について、安藤・大村・花沢 (1967, pp. 54-58) は当を得た分類と説明を行っている。つまり、これまで妥当性について研究者が様々の分類を行ない、異なる名称を不統一に用いていた (表 1) のを、表面的妥当性、理論的妥当性、経験的 (ないし統計的) 妥当性、概念的妥当性のように大きくまとめて分類し、さらに、それぞれの妥当性を細かく下位分類しているのである (表 2)。

注) *本研究にあたり、資料の収集に御協力下さった大阪市立吉野小学校の児童のみなさんと担任の先生方に心からの謝意を表します。

大阪市中央児童相談所判定係長, *京都市児童相談所心理判定員, ****大阪府中央児童相談所判定課長

表 1 妥当性の種々相（安藤・大村・花沢，1967，p. 55）

参 照 文 献	妥 当 性 の 分 類
Cronbach, L. J. Essentials of Psychological Testing, 1949	1. 理論的 (logical) 2. 経験的 (empirical) 3. 因子的 (factorial)
Anastasi, A. Psychological Testing, 1954	1. 表面的 (face) 2. 内容的 (content) 論理的妥当性, 定義による妥当性 3. 因子的 4. 経験的
Technical Recommendations for Psychological Tests and Diagnostic Techniques (Psychological Bulletin Supplement, 51 : March 1954)	1. 内容的 (content) 2. 予測的 (predictive) 3. 併存的 (concurrent) 4. 概念的 (construct)
Guilford, J. P. Psychometric Methods, 1954. 秋重義治監訳：精神測定法 培風館 1959.	1. 仮定の妥当性 2. 本質的 (intrinsic) 3. 関係の (relevant) 4. 表面的
Thorndike, R. L. & Hagen, E. Measurement and Evaluation in Psychology and Education, 1955	1. 理論的 (rational) (内容的, 概念的) 2. 経験的 (統計的) congruent, 併存的, 予測的

表 2 妥当性の分類（安藤・大村・花沢，1967，p. 57）

I 表面的妥当性 (face validity)	
II 理論的妥当性 (rational validity) ① 内容的妥当性 論理的妥当性 仮定による妥当性 定義による妥当性 ② 因子的妥当性	III 経験的妥当性 (empirical validity) 統計的妥当性 ① 併存的妥当性 (concurrent validity) ② 予測的妥当性 (predictive validity)
IV 概念的妥当性 (concept or construct validity)	

本研究でとりあげようとする P-F Study についてはここでは特に Koch (Koch, K., 1948; Koch C., 1952; Koch 著, 林・国吉・一谷訳, 1970; 林・一谷編著, 1973) の考案した Baumtest (Tree Test) との関係のみようとするものであって, 上に記述してきた安藤ら (1967) の妥当性の分類基準に従えば (表 2 参照), III の経験的 (ないし統計的) 妥当性のうち, ①の併存的妥当性に該当するものとみることができる。

さて、P-F Study に再びもどって、この妥当性について言及すると、理論的妥当性のうち、内容的妥当性、因子の妥当性、予測的妥当性などについては、これまで我々の研究グループでかなりの研究を積み重ねてきた（一谷・津田・西尾・岡村，1971，1973a, b；一谷・林，1976；一谷・津田・飯田・出井，1974）。

さらに、Baumtest についても、津田舜甫，小池清廉，国吉政一，林勝造らが我が国に導入して、かなり大がかりな研究が行なわれてきた（これらについては、コッホ著；林・国吉・一谷訳『バウムテスト』，東京，日本文化科学社，1970の『補遺』（日本におけるバウム・テストの研究）（pp. 111-150）にかなり詳細に報告されているので，ここではそのことについては詳しくは言及しないことにする）。

そして、その後も林・一谷（1973）によって我が国の主な研究者のものが編著として出されたのである。さらにその後も、一谷・津田・林（1975）によって、S-D 法（Semantic differential method）などを用いて、特定の臨床群（具体的には登校拒否児童）の描いた樹木画を中心に因子的検討などが積み重ねられてきた。

ところで、P-F Study や Baumtest は、我々の初期の研究段階にあっては、ひとつには、臨床的に非常に使用が多面的であることに注目していた。すなわち、たとえば、臨床群の代表として我々がとりあげてきたものには、場面緘黙症の児童や登校拒否児童などがあるが、場面緘黙症の場合のように、殆ど vocal な言語的コミュニケーションが成立しにくいときにも、P-F Study や Baumtest は適用が可能であったわけである。

また、就学前の幼児についても、文字を理解していなくても、Baumtest は適用可能であるし、P-F Study にしても、個別的に、frustration agent (frustrater) の側の刺激語をよんできかせることにより、絵の場面を提示しつつ、被験者には frustrated person (frustratee) としての反応語をとることが可能であったわけである。このようにして、我々は、投影法の基礎となる事からについて、P-F Study と Baumtest で代表させて、種々の検討を重ねてきたわけである。

これらは、いわば、先に述べたところのテストとしての投影法の妥当性をいろいろの視点から吟味検討してきたものということができるように思う。

たとえば、従来我々の行なってきた P-F Study と Baumtest についての研究のうちで、「場面緘黙症の研究（Ⅱ）」（一谷・津田・西尾・岡村，1973b）では、場面緘黙症児の予後との関連を P-F と Baumtest とに関連づけながら言及した。そして、同時に、P-F と Baumtest との両方の反応パターンや描画パターンとの対応をもみてきたのである。

それらの結果からは、こうした臨床群において、P-F 反応パターンと Baumtest での樹木描画パターンとの間に相当に有力な臨床的関連のあることを、とりわけ予後との関連において、みることができたのである。

しかしながら、この研究においては、特定臨床群においてみたもので、症例も少なく、統計的に十分に吟味されたものではなかった。示唆的にも相当に含蓄的な関連のあることはみられたことはもちろんではあるが。

また、同じ時期の研究で、一谷・津田・西尾・岡村（1975）は、はしけにのって海上生活を主体としている「海の子」や、何らかの事情で養護施設にあずけられている「養護児」、それに家庭から保育所に通園している在宅の「保育児」（これらはいずれも各群ともに就学前の年令の幼

児であった) について、P-F 反応パターンと Baumtest での描画パターンの特徴をみたところ、かなりの対応関係があることが示唆されはしたが、直接的には関連づけるという手だてではふまなかった。

これらの研究経過からうかがえるように、我々としては、一応、健常な被験者を用いて、両テストの間にどのような関連があるのかを統計的にも検討してみる段階にさしかかっているのではないかと考えたわけである。

そこで、今回の研究は、具体的には公立小学校の学童期にある児童の P-F Study への反応パターンと、Baumtest での樹木描画のパターンとの特徴を、主だったものについて関連づけてみることにしようと考えたわけである。

こうした側面の検討は、先に触れたテストの妥当性の種々相ないし分類の観点からすると、経験的ないし統計的妥当性のうち、併存的妥当性を検討することになると思われる。

もちろん、これら 2 種の投影的技法としてのテストのうち、いずれが pilot 的役割を果たすものなのかの規定はここでは明確化しにくいのである。むしろ、それを行なうことの方が、どちらかといえば、一方のテストに対して我田引水的になり、かたよった側面からしかみないことになるのかもしれないと考えている。

したがって、ここでは両テストの対応関係を統計的に吟味してみることが中心となる。むしろ、両テストが、これまでの研究的経過からみて、相互に pilot 的役割を果たしつつ吟味検討されるとみるのが、現段階においては妥当な観点ではないかと考えている。

目 的：

これまで述べてきたような、P-F Study と Baumtest との研究の経過からみて、本研究においては、両投影技法の関連を、児童を用いて、統計的に検討することが主たる目的である。換言すれば、テストのもつ妥当性のうち、併存的妥当性についてみるのがその目的である。

方 法：

被験者は都市部にある公立小学校の男児16名、女児18名、計34名である。

用いた P-F Study と Baumtest の資料は、これら34名の児童の小学校 2 年時のものと、同一児童の小学校 4 年時のものとである。

P-F Study の教示と反応の整理については、『改訂版 P-F スタディ使用手引』（住田・林・一谷、1964、京都、三京房）に従った。

Baumtest についても Koch (Koch, K., 1948; Koch, C., 1952; コッホ著・林・国吉・一谷訳、1970) に忠実に従った。この Baumtest は、2 枚連続でかかせて、十分に描いていると思われる方のものを採択した。ただし、1 枚目と 2 枚目とのあいだに P-F Study を団体で実施している。なお、Baumtest についても、相互に見たり見せたりしない範囲で適当に机の間隔を離して集団で実施し、自由に納得のいくところまで、児童の水準でもうこれでいいと思うところまでかかせた。

結 果 と 考 察：

結果については、表 1 と表 2 に示す通りである。

これらの結果について言及するまえに、先ず結果の整理やまとめ方についてみておきたいと

表 1 P-F の評点因子とバウムテストでの描画パターンとの関係

P F 反 応	バウム項目	幹 太 い				幹 左 寄				幹 左 傾				幹 右 傾				実 の 強 調				根 の 強 調				
		学 年 時		24年計		x²	24年計		x²	24年計		x²	24年計		x²	24年計		x²	24年計		x²	24年計		x²		
		出 現 頻 度	10	7	17		14	10		24	5		3	8		8	3		11	9		18	27		13	20
GCR	GCR	+0	4	4	8	**	7	5	12	**	3	2	5	4	1	5	†	3	9	12	**	10	10	20	**	
		-0	4	4	2	10.790	6	10	16	18.459	2	1	3	9.038	2	2	4	5	6	11	14.653	1	7	8	46.678	
		-	2	1	3	1	0	1	0	0	0	0	0	2	0	2	1	3	4		2	3	5			
E 反 応	E'	+0																								
	E	+0					1	0	1	**					4	2	6	**	0	2	2	*	0	3	3	**
		-0					6	6	12	14.133	7	4	11	3	0	3	9.711	7	8	15	7.499	3	9	17	11.464	
I 反 応	e	+0	1	2	3	*																				
		-0	4	3	7	6.812																				
		-	5	2	7																					
M 反 応	I'	+0																								
	I	+0																1	8	9	†	6	6	12	**	
		-0																8	9	17	5.970	7	13	20	9.978	
M 反 応	i	+0					8	5	13	**	4	1	5	9.038				5	5	10	*	6	5	11	*	
		-0					6	5	11	24.248	1	2	3	0				4	12	16	8.308	7	13	20	6.742	
		-					0	0	1	0	0	0	0					0	1	1		0	2	2		
反 応 の 方 向	M'	+0																								
	M	+0					7	5	12	**								5	10	15	**	4	7	11	*	
		-0					5	5	10	18.170	2	0	2					4	7	11	27.331	8	13	21	7.863	
反 応 の 型	m	+0																0	1	1		1	0	1		
		-0																								
		-																								
反 応 の 方 向	E%	+0																								
	I%	+0					6	4	10	**	3	2	5	9.038				5	10	15	**	9	6	15	**	
		-0					7	6	13	10.455	2	1	3	0				4	7	11	27.331	4	14	18	20.996	
反 応 の 型	M%	+0					1	0	1	0	0	0						0	1	1		0	0	0		
		-0																								
		-																								
反 応 の 型	O-D%	+0																								
	E-D%	+0	6	2	8	**									7	2	9	**				4	5	9	†	
		-0	4	5	9	10.706									1	1	2	29.122				8	15	23	4.657	
反 応 の 型	N-P%	+0													0	0	0	†								
		-0													3	3	6	5.098								
		-													5	0	5									
超 自 我 因 子	E%	+0																								
	I%	+0					7	3	10	**								3	7	10	*	8	5	13	**	
		-0					7	5	12	9.922	0	2	2					6	9	15	7.499	5	13	18	11.939	
超 自 我 因 子	E+I%	+0													6	1	7	**				6	6	12	*	
		-0													2	2	4	14.348				6	11	17	8.445	
		-													0	0	0					1	3	4		
超 自 我 因 子	E-E%	+0																								
	I-I%	+0																								
		-0																								
超 自 我 因 子	M+I%	+0					6	3	9	*								6	8	14	**	3	6	9	†	
		-0					8	6	14	7.425	0	1	1					3	9	12	23.399	10	13	23	4.657	
		-					0	1	1									0	1	1		0	1	1		

- (注) 1. P-F 反応について、(+) (0) (-) の記号は、標準との平均から +1 S. D. 以上の得点のものを (+), M ± 1.00 S. D. の範囲の得点のものを (0), 平均から -1 S. D. 以下の得点のものを (-) としてあらわし、その頻度を示している。
2. x²-検定の値は、2 年時と 4 年時をあわせての (計) の頻度について、期待頻度とのあいだについておこなった x²-検定の結果の値を示してある。
3. **, *, † はそれぞれ、1% 以下、5% 以下、10% 以下の有意水準を示す。
4. 頻度が示されていない空白のところは、有意水準に達しなかったもので示さなかったものである。

表 2 P-F の反応転移とバウムテストでの描画パターンとの関係

反応転移	バウム項目	幹太い			幹左寄			幹左傾			幹右傾			実の強調			根の強調							
	学年時 頻数	2年	4年	計	χ^2	2年	4年	計	χ^2	2年	4年	計	χ^2	2年	4年	計	χ^2	2年	4年	計	χ^2			
		10	7	17		14	10	24		5	3	8		8	3	1		9	18	27		13	20	33
1	E' ← 前半																							
	E' → 後半																							
	I' ← 前半																							
	I' → 後半																							
	M' ← 前半																							
	M' → 後半																							
2	E ← 前半	7	4	11	**	4	6	10	*			4	2	6	*	3	7	10	*	5	13	18	**	
	E → 後半	1	0	1	6.750	1	0	1	5.818			0	0	0	4.167	0	1	1	5.818	2	0	2	11.250	
	I ← 前半																							
	I → 後半																							
	M → 前半					0	0	0	**							0	0	0	**	0	0	0	**	
	M ← 後半					6	4	10	8.100							3	6	9	7.111	4	8	12	10.083	
3	e ← 前半					7	7	14	**						6	7	13	**	7	14	21	**		
	e → 後半					1	0	1	9.600						0	1	1	8.643	1	1	2	14.087		
	i ← 前半																							
	i → 後半																							
	m ← 前半																							
	m → 後半																							
4	E ← 前半	7	5	12	**	8	6	14	**			5	1	6	*	6	8	14	**	6	15	21	**	
	E → 後半	0	0	0	10.083	0	0	0	12.071			0	0	0	4.167	0	0	0	12.071	0	0	0	19.048	
	I ← 前半	0	0	0	*															2	0	2	*	
	I → 後半	5	3	8	6.125															1	9	10	4.083	
	M ← 前半	0	0	0	**	0	0	0	**			0	0	0	**	0	0	0	**	0	0	0	**	
	M → 後半	7	7	14	12.071	12	7	19	17.053			7	2	9	7.111	7	10	17	15.059	7	18	25	23.040	
5	O-D ← 前半	0	0	0	**	0	1	1	*							0	0	0	**	0	2	2	**	
	O-D → 後半	6	4	10	8.100	6	2	8	4.000							7	4	11	9.091	7	6	13	6.667	
	E-D ← 前半																							
	E-D → 後半																							
	N-P ← 前半																							
	N-P ← 後半																							

(注) 1. **, * はそれぞれ 1%, 5% 水準以下で有意。

2. その他のことがらについても表 1 の(注)の場合と同様にみる。

思う。

P-F 反応については表1にみるように評点因子については手引きに従っているので特に言及することはない。また、反応転移については表2に示されているが、これについても手引きに従っているので言及の必要はない。

Baumtest については、今回の研究では、特に「幹が太いか細いか?」、「幹が左寄りか右寄りか?」、「幹が右傾しているか、左傾しているか?」、「実が強調されているか?」、「根が強調されているか?」を中心にみた。

いうまでもなく、Baumtest においては種々の側面から、しかも相互に関連づけながらみることが出来るわけだが、今回は上に述べたものに限られている。

Koch によると、一般には、幹は自我のあり方を示唆しているとされる。したがって、まず、P-F Study も自我の水準の反応を中心としていることから、仮説的には、P-F との関連がみやすいのではないかと仮定に立っている。

そして、幹が太いか細いか、右寄りか左寄りか、右傾しているか左傾しているかは、最も大きな水準から自我の定位のあり方がうかがえると考えたものである。

表1にみるように、幹の細いもの（「幹細い」）がないのは、全体で34名のうち、小2と小4とを合わせると延べ数として68名になるが、非常に細いものは統計的検定をするのには余りに人数が少なすぎた（2～3名程度であった）ので今回はとりあげなかったことをことわっておきたい。

また、同じく表1にみるように、幹右寄りのものも極く少なかった（3～4名程度）のでこれも一応今回はとりあげなかった。将来、これらについてはもっと多くの子どもの資料にもとづいて吟味してみる必要があることはいうまでもない。

また、実の強調については、Koch 流に言えば、実は樹木の最終の所産であるから、それをどのように描くか、あるいは描いているかいないかは、物事に対処して、結果のみを重視するかどうかにかかっているとの仮定から、P-F 反応との対応も吟味しやすいと考えるのである。すなわち、自我をどのような形で発現させるかということとの関連が P-F 反応には出現可能な面があるのだろうと考えた。

また、根の強調については、樹木を描いた際に根を描出することは、何らかの安定性を求めているものとこれまでの臨床的経験から示唆される面があるのでこれを取り入れたのである。

その他、葉についてもみてる必要性を感じたが、Baumtest での樹木描出は非常に多様化、複雑化しているので、とりあげ方が非常に複雑化する可能性もあるため、更に、今後の臨床的検討のうえに立って再考してみることにした。

要は、この研究では、Baumtest にみられる自我定位 (Ego-orientation) のあり方を主として幹の描出のあり方からみていくことを主な視点とし、それがどんな形で発現されるかを、今回は実と根を中心にみていくことに限定されている。

さて、表1と表2とにみるように、また、先にも述べたように、実際には34名の児童の Baumtest と P-F とを、小学2年時と4年時とったものを、延べ68名として一応処理している。

したがって、たとえば表1の「幹太い」の項で、2年の出現頻度10名、4年の出現頻度7名、合計17名となっているが、これは、2年で34名のうち10名、4年で34名のうち7名が幹を太く（実際には、ひとさし指と、中指と、くすり指との3本を合わせた程度に、またはそれ以上に太

いものを指している) 描出したものがあつたことを示しているのであつて、パーセントとしてはかなり低いけれども、こうした特徴が P-F 反応とどう対応するかを吟味しているわけである。

そして、 χ^2 -検定の欄については、この2年時と4年時とをあわせての頻数について、期待値との間で検定されている。以下の項目についても同様である。

P-F 反応については、小学校2年時のものと4年時のものとを平均してとつてある。それぞれの評点因子について (+)(0)(-) の記号で分けられているのは(表1の場合)、(+)は、標準化データーの平均値から1標準偏差以上の得点 ($M+1\text{ S.D.}$) で出ているものを、(0)は $M\pm 1\text{ S.D.}$ の範囲の得点のものを、また (-) は $M-1\text{ S.D.}$ 以下の得点のものを示していることをことわっておく。表2については反応転移であるが、これは小2と小4のをみて一貫して両学年ともに同一方向に出ているもので転移の有無を示した。

要するに、基準となる頻数は Baumtest によつてゐる。そして表1では、それぞれの P-F 評点因子について (+)(0)(-) のものを加えると、人数は「計」と等しくなる。けれども表2では必ずしもそうでないのは反応転移を示していないものもあるからである。(そういう点では「反応転移のないもの」をも加味して χ^2 -検定を行うべきであつたかもしれないが、傾向としては大きな齟齬は生じないとの判断に立つた。)

以上に述べたような事情のもとに、結果をみつつ考察を加えていくことにした。Baumtest の描画パターンを基準にしてみても、P-F 反応パターンを基準にしてみても、どちらでもよいが、ここでは一応、前者を基準にして、表1と表2をみて考察することにしておく。

なお、表1、表2ともに、数値の記入されていないところは、有意差がなかったところである。つまり、これら2つの表では、 χ^2 -検定で有意差が5%水準以下であつたか、または、10%水準で有意差の傾向の出たもののみについて示してある。(これらについては、表1の(注)を参照されたい。表2についても同様である。)

1. 「幹の太い」ものと P-F 反応パターンとの関係

幹が太くえがかれているものについては、GCR, e, E-D% に有意差がみとめられる(表1)。

つまり、幹を太く描出するものは、GCR が (+)(0) のものが多く、e は低い傾向にあり、E-D% は高い傾向を有意に示しているということである。

これらは、社会的適応を示しつつ、他者への依存、他者からの庇護・救済を求める傾向が少なく、自我防衛性が発達していることを示唆している。つまり、社会化された形で、積極的な適応を示しているようにうかがえるのである。

表2にみるように、幹を太く描出するものは、 $E \leftarrow$ と、 $E \leftarrow, I \rightarrow, M \rightarrow, O-D \rightarrow$ という5種の反応転移がみられる。前半は E が強調され、それが E にも影響しているが、後半は I や M に流れていること、また、O-D に流れていくことを示している。自己の置かれている現実との関係をよく吟味しつつ社会的適応をしているのではないかと思われる。

以上から考えられることは、幹を太く描出する場合には、児童の場合、かなり expansive ではあつても、適応性を欠くような側面はあまりみられないのである。このことについても今後検討を加えてみる必要性はあろう。というのは、画面からはみ出した幹を太く描出しているかどうかという関係なども十分検討してみたうえでのことかもしれないからである。

2. 「幹左寄り」と P-F 反応パターンとの関係

幹を画面の中心より左寄りに描くものは、GCR が (0) または (+) のものが多く、E は少なく、i は高く、M も高く、I% の高いものが多く、I% も高いものが多く、M+I% についても (+) または (0) のものが多いということが表1でうかがえる。

そして、表2からは、E ←, M →, e ←, **E** ←, **M** →, O-D → の傾向にあるといえる。

これらから特徴的にいえることは、幹を左寄りに描出することは、自我定位において、自己の置かれている環境に積極的に立ち向かう、いわゆる、生への対決というよりも、生への傍観的傾向がつよいのであって、どちらかといえば、内面的、内向的、自省的、自制的傾向がつよいということである。

このように考えてみると P-F 反応パターンはかなり有力にそのことを示唆しているとみてよからう。つまり、E が少なく、i が高いことはそのことを明確にほめかしており、超自我阻害の状況にあっても、一応自己の非をみとめたうえで弁解や言い訳が多く、「自分はそうしていない」とか「私はそうではない」といった形の否定的弁解 (E) はあまりやらないことが多いように思われる。

こうした内面化傾向、内省的傾向が先に立つことは、欲求不満状況においても、自罰的、内罰的傾向と対応してももっともなことではなかろうか。

そして、必然的に I% も高くなり、外罰的傾向 (E) は低くなり、それが根幹となって自他許容、不可避の言及ないし妥協反応 (M) も高くなるのだろうと予想される。したがって、同じ M でも、幹を太く描出するのとはかなり内面的にはちがうことが示唆されているように思う。

けれども、反応転移をみると、E ←, e ←, **E** ← と前半には E 系統が出る傾向があり、後半に M →, **M** →, O-D → となることから、自分を十分に表出できない、焦燥感やいら立ちがあることがうかがえ、他者に依存したり、庇護・救済を求めたいという傾向のあることもうかがえる点は注目すべきであろう。しかし、基本的に I 系統の反応に転移はなく、P-F でいえば、I 系統反応が主流をなしているかにうかがえるのである。

3. 「幹左傾」と P-F 反応パターンとの関係

幹を左傾的に描出するもの、つまり、幹の位置が画面全体からみてどうなっているかにかかわらず、幹が根元から次第に左に傾いていくものには、GCR が高く、i の傾向があり、I% が優位であるという結果 (表1) になっており、反応転移は全く認められないのである。

ここでもやはり、「幹左寄り」と同じく、i が強調されていて、それが I% にも影響していることがうかがえる。やはり、自己にまず眼を向ける傾向がつよく、自分のとった行動についても undoing (帳消し、取消し) のメカニズムが優先することが特徴のようである。

しかも、反応転移がみられず、一貫していることが注目をひく。欲求不満におとし入れられても、時間の流れに伴って、継時的に自己のあり方を変容させることのないところが大きな特色である。自我定位を適度にしっかりと保持しつつも、内面化傾向のつよいことをうかがわせるものであろう。

4. 「幹右傾」と P-F 反応パターンとの関係

GCR が高く、E 反応が高く、E-D % がかなり優位で、N-P % が低く、E+I % が高いことがうかがえるのである（表1）。

また、反応転移をみると（表2）、E ←、E ←、M → の傾向を示していることがうかがえる。

幹の右傾は、自我定位的にみれば、生への対決を示唆しており、積極的に環境に接近することを示しているが、そのことが P-F 反応パターンにおいて「幹左傾」のパターンとは対照的にみられるのである。そして、超自我因子にもそのことがみられる（E+I %）。これは、E の高いことからして、E がかなり高いのではないか（E % には明確に出ていないが）ということを示唆させるものであって、おそらくは、自己否定による弁解（「ぼくはそうではない」、「わたしとちがう」）がかなり多いことを予想させるものである。しかし、M → から、一応の限界吟味、現実吟味、妥協、事態の不可避性への言及、などの点は十分にうかがえる。要するに、幹右傾の描出は、積極性をかなり示唆するものである。

5. 「実の強調」と P-F 反応パターンとの関係

「実の強調」は樹木なり樹冠に実を多く描出しているか、数が少なくても、非常に大きなものを描いているかを基準として採択している。

表1にみるように、GCR が高いものが多く、E は低く、I は中間的傾向にかたむき（どちらかといえばIの高いものもあるが）、i が高く、M が高く、I % も高く、I % もたかく、M+I % も高い。

そして、反応転移をみると、表2にあるように、E ←、M →、e ←、E ←、M →、O-D → となっている。

先にも少し触れたように、実というものは、樹木においては、最終の所産であり、最終の結果である。ここでは樹木なり、樹冠との関係において、もっと精査しないと十分なことは言及しがたいが、M が最も顕著に有意差をもっていることからみて、一応妥当な示唆を与えているように思われる。

つまり、上にも述べたように、実は最終的な生産物で、いうなれば結果重視にとらわれ、そこにいたる経過やいきさつはあまり問題としない自我定位のあり方である。そういう点では M と対応しても不思議はない。

M は、Rosenzweig では、根底にエロチックなドライブがあり、エロスのリビドーがあるとすると。そこから、欲求不満におちいっても、愛情喪失への恐怖と愛情獲得への欲求が強く作用し、人との疎隔 (alienation) を恐れる自我が働くとする。そして典型的な行動異常型としてはヒステリーを想定し、分裂症状的には、破瓜型を予想している。つまり、ヒステリーは空虚な仮面をかぶった人のようで、内面は無視され、重視されないのである。そして時には仮面をかぶった人のように無表情、無感動、無関心ともなって分裂症的傾向を示すこともあると考えられているのである。

かくして、実の強調は、結果重視であり、現実にのみとらわれ、過去を重視しないのである。そして、それは P-F の M とも対応する。

けれども、ここでは表2にみるように **I%** も高く出ており、それは帰因的には、**I** や **i** にあるといえることから、必ずしも上のように **M** との関係のみを強調する向きは妥当でなかろう。その理由としては、やはり、Baumtest の固有的本来的特色としての、全体印象や他の諸側面、つまり、葉や幹、枝ぶりなどの関係も考慮してのことではなくてはならないものだからである。それらが考慮されて、この P-F 反応パターンの傾向は言及しうるものだが、ここでは今のところその点については今後にまたざるを得ない。また **I%** や **M+I%** の高いことについても同様だが、**M+I%** については、**M** と **I%** の高さに帰着せしめうるだろう。

反応転移についても十分な解釈は今のところ差しひかえておきたい。**e←** については、やはり結果重視の幼稚さ、未熟さが手伝っているようには思われる。

6. 「根の強調」と P-F 反応パターンとの関係

表1にみられるように、P-F 評点因子についてみれば、根を強調して描出する場合には、GCR が高く **E** は低く、**I** と **i** とは中間的、**M** も中間的、**I%** も中間的、**E-D%** も中間的、**I%**、**E+I%**、**M+I%** もともに中間的なものが優位を占めている。

また、反応転移については、表2にみるように、**E←**、**M→**、**e←**、**E←**、**I→**、**M→**、**O-D→** の傾向がみられる。

とりわけ、特徴的なのは **e←** であって、根を描出することが、自我定位（幹をえがく）をする場合に、基本的なよりどころをどこかに求める傾向のあることをうかがわせている点はある程度理解できる。その他については、評点因子は中間的なものが多くて左程言及を要しないが、反応転移に **E** 系統の反応を前半に出しつつ、そのなかにあっても何かよりどころを求めているのかもしれないよわさを示唆し、それが **M→**、**M→**、**O-D→** へと逃げていくのかもしれないと思われる。

以上のようなことでまだ十分には判断できにくい面もかなり多いことは卒直に認めなくてはならない。それらについては今後の検討にまづことにしたい。

次に、P-F 反応パターンの側から Baumtest の描出パターンをみてみるとどうだろうか。評点因子では、

- (i) GCR は、ここでとりあげた Baumtest の描出パターンのすべてに高く出ている。
- (ii) **E'**、**I'**、**M'** のような **O-D** 反応には共通して特徴がない。
- (iii) **E** は幹「左寄り」に低く、「幹右傾」に高く、「実の強調」、「根の強調」には中間的傾向とともに、低い方向に出ている。
- (iv) **e** は、「幹太い」に少ない。
- (v) **I** は、「実の強調」、「根の強調」に中間的に出ている傾向が強い。
- (vi) **M** は、「幹左寄り」と「実の強調」に高く、「根の強調」に中間的に出ている。
- (vii) **E%**、**M%**、**O-D%**、**E%**、**E-E%**、**I-I%** には共通して差が出ない。
- (viii) **I%** は、「幹左寄り」に高いか中間的、「幹左傾」にかなり高く、「実の強調」にも高く、「根の強調」には中間的かまたは高い。
- (ix) **E-D%** は「幹太い」に高い傾向にあり、「幹右傾」に高く、「根の強調」には中間的である。

(x) $\underline{I}\%$ は、「幹左寄り」に高い傾向にあり、「実の強調」に中間的、「根の強調」にも中間的傾向にある。

(xi) $\underline{E}+\underline{I}\%$ は「幹右傾」に高く、「根の強調」には中間的かまたは高い。

(xii) $\underline{M}+\underline{I}\%$ は、「幹右り」に中間的かまたは高く、「実の強調」でもそうで、「根の強調」では中間的である。

一方、反転移については、

(i) O-D 系統 (E' , I' , M') には共通して出ない。

(ii) I , i , m , $E-D$, $N-P$ の反応転移にも共通して出ない。

(iii) E は、「幹太い」が前半、「幹左寄り」, 「幹右傾」, 「実の強調」, 「根の強調」にも同様に出自している。

(iv) M は、有意差のあるものはいずれも後半に出自している。

(v) e も M と同様の Baumtest の項目に出自しているが前半に出自するという具合に M とは逆である。

(vi) E は Baumtest の項目で有意に出自しているものはいずれも前半に出自している。

(vii) I は、「幹太い」と「根の強調」に後半に出自している。

(viii) M は有意差の出ないのは「幹左傾」のみで他の 5 項目はすべて後半に出自している。

(ix) O-D は、「幹左傾」と「幹右傾」には有意差が出ず、他はすべて後半に出自している。

このようにみえてくると、ある意味では、かなり共通して有意差の出る P-F 反応項目と、全く共通して有意差の出ないものとは、一般的なもの、一般的傾向としてみることもできるという考え方も成立する。

そういう視点からみると、Baumtest の方を基準にしてみた場合と、P-F Study を基準にして関係づけた場合とは、同じことを記述してはいるものの、上述の全般的共通性の項目（共通的に有意差が出たり、出なかったりしているもの）を除外的にみると、かなり興味ぶかい対応関係のあることに気づくわけである。

今後の検討にまわってさらに精査すべき点は多いが、かなり示唆に富んだ関連性のあることがみとめられ、併存的妥当性についてそれなりに意義のある結果をもたらしたと思われる。今後はさらに人数も多くして検討してみたい。今回はその試みのなものの探索的なものと考えてるのが穏当のようである。

結 論 と 要 約：

これまでの我々の研究グループの P-F Study と Baumtest との種々の側面からの研究をさらに発展させるべく、また、両投影法の併存的妥当性を検討すべき必要性から、小学校の児童を用いて、この両テストの対応関係、関連性を吟味検討してみた。

被験者が十分でなかったために、今後の検討にまわすべき点も多かったが、主要な知見としては次のようなことがみられた。

(i) Baumtest で「幹の左寄り」の場合には、 i の反応が過半数を占めるとともに、 M 反応もそれに対応する形になっている。GCR が高く、転移において $E \leftarrow$, $M \rightarrow$ の多いのは、普通児に一般的な形だが、このうち、 $e \leftarrow$ の転移が注目をひく。 E 反応も少ない。

(ii) 「幹の左傾」するものは、「左寄り」の描出とはほぼ同様の結果を示す。しかし E 反応は「左

寄り」のものほど顕著にはみられない。

(iii) 「幹の右傾」するものでは、E 反応が平均より高いものが相当にみられ、また、E-D % の高いものも多い。

(iv) 「実が強調」されたり、実を多く描出するものは、M-反応が平均より高く、 $M+1\text{ S.D.}$ 以上顕著にあらわれるものの多いことがうかがえる。が同時に、I % も高いものの多いことを示している。 $M+I\%$ も高いものが多い。また、反応転移においても $e\leftarrow$ のものがかなりみられる。

(v) 「根を強調」して描出するものは、 $e\leftarrow$ が相当数のものにみられる。その他にはさほど目立った特徴はない。

(vi) 「幹の幅の太い」ものは、 $E\leftarrow$ の転移がかなり著しくうかがえる。

これらは概然的な傾向で、目下のところ十分に解釈できるものばかりではないが、それらは今後検討してかかる必要がある。

こうした結果について、主として、Rosenzweig の考え方と、Koch の理論的背景などを中心に考察を加えて言及した。

また、今後、とりわけ投影法は一般に力動的見解をとり入れることが多いが、投影法でいうこうした力動的側面について、2つのテストをどのように対応づけ、関連づけるか、その方法などがこれからの課題でもある。

参 考 文 献

- 安藤公平・大村政男・花沢成一 (1967) 心理検査の理論と実際, 東京, 駿河台出版社。
- Cronbach, L. J. (1970) Essentials of psychological testing. 3rd ed., Harper & Row.
- Cronbach, L. J. (1971) Test validation. In R. L. Thorndike (Ed.) Educational measurement. 2nd ed. American Council on Education.
- Cronbach, L. J., and Glesser, G. C. (1965) Psychological tests and personnel decisions. 2nd ed., Univ. of Illinois Press.
- Cronbach, L. J., and Meehl, P. E. (1955) Construct validity in psychological tests. Psychol. Bull., 52, No. 4, 281-302.
- 林 勝造・一谷 彊 (編著) (1973) バウム・テストの臨床的研究, 東京, 日本文化科学社。
- 一谷 彊 (1976) P-F 反応とバウム・テストでの樹木描画との関係 日本教育心理学会第18回総会発表論文集 pp. 370-371, (昭51.10.5. 於埼玉大学)
- 一谷 彊・林 勝造 (1976) 投影法の基礎的研究——Rosenzweig- P-F Study を中心として—— 東京, 風間書房。
- 一谷 彊・津田浩一・飯田美智子・出井康子 (1974) 登校拒否児の性格と予後 (I)——Rosenzweig P-F Study にみられる反応様式と予後調査との関係についての検討——京都教育大学紀要 Ser. A, No. 44, 1-20.
- 一谷 彊・津田浩一・西尾博・岡村憲一 (1971) 場面緘黙症の研究 (I)~(IV), 日本応用心理学会第38会・関西心理学会第83回大会発表論文集。
- 一谷 彊・津田浩一・西尾 博・岡村憲一 (1973a) 場面緘黙症の研究 (I) ——形成要因と心理機制について——京都教育大学紀要 Ser. A, No. 42, 1-28.
- 一谷 彊・津田浩一・西尾 博・岡村憲一 (1973b) 場面緘黙症の研究 (II) ——バウムテストおよび P-F スタディにみられる特徴と予後との関係——京都教育大学紀要 Ser. A, No. 42, 29-52.

一谷 彊・津田浩一・西尾 博・岡村憲一 (1975) 投影法での反応と養育環境との関係についての比較研究——バウムテストと P-F スタディを中心に——京都教育大学紀要 Ser A, No. 46, 23-46.

一谷 彊・津田浩一・林 勝造 (1975) S-D 法によるバウムテストの 因子的検討——診断のための 探索的 試み——京都教育大学紀要 Ser. A, No. 47, 1-16.

Koch, K. (1948) Der Baumtest: Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. Bern: Hans Huber.

Koch, C. (1952) The Three Test. Bern: Hans Huber.

コッホ著：林 勝造・国吉政一・一谷 彊訳 (1970) バウム・テスト, 東京, 日本文化科学社.

住田勝美・林 勝造・一谷 彊 (1964) ローゼンツァイク人格理論, 京都, 三京房.

住田勝美・林 勝造・一谷 彊 (1964) 改訂版 P-F スタディ使用手引, 京都, 三京房.

Summary

In some of the previous research, the validity of P-F Study and Koch's Baumtest (Tree Test) had been examined and verified by our group members. These previous research had, however, been mainly and exclusively concerned with the content, factorial, or predictive validity of each projective technique above mentioned.

In the present study, each member of our group felt to be necessary to test the empirical (or statistical) validity of the two tests. The purpose of this study was, therefore, to examine the concurrent validity between the two tests.

The subjects used for this purpose were 34 primary school children of the second and fourth grades.

The results fairly well supported the implications of some of assumptions with which we had been concerned through our previous research. These results were discussed by Koch's view, Rosenzweig's theory, and in relation to some of results of our previous research.